

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」から]

主宰論説18

ロアール溪谷古城探訪記

前日、トゥール・ジロドーというホテルに宿泊し、ロワール地方に向かった。これは、フランス中部のロワール溪谷の古城めぐりの紀行文である。

アンボワーズ城とシュノンソー城は、シュリー・シュル・ロワールとシャロンヌ間ロワール溪谷にある古城である。アンボワーズ城は、古代ローマ時代の砦を基にして、15世紀の末に、シャルル8世が完成させたもので、シャルル7世、ルイ11世、シャルル8世、フランソワ1世らのバロア王朝の国王たちが過ごしたようである。フランソワ1世は、シャルル8世の後を引き継いで、フランス・ルネッサンスを高めようとし、16世紀の不世出の天才といわれる「モナ・リザ」の絵を抱えたレオナルド・ダ・ビンチを招聘した。彼は、フランソワ1世のために、この古城で3年を過ごし、様々な設備を設計した。1519年にクルーで死去したが、彼の遺志に従って、彼の遺体は、アンボワーズ城のサン・フロランタン教会堂に葬られている。「モナ・リザ」の絵自身は、現在パリのルーブル博物館にあるが、元々は、この古城に持参したようだ。このフランソワ1世は、対外的には、イタリアやスペインとの戦争に敗れ、スペイン戦争で、自身カール5世の捕虜になるなど、失敗続きであったが、対内的には、貴族を制圧して、王権を高め、「フランス・ルネッサンスの父」と言われるように、文化的興隆に貢献した名君であったようだ。反面、新・旧教徒の対立の源になったというマイナス・イメージもあるようだ。アンリ2世は、フランソワ1世がスペインの捕虜になって、釈放の交換人質としてスペインに送られることになった折、侍従の娘に心打たれる態度で送られたことを覚えていたようであり、その娘が、ディアーヌ・ド・ポワティエである。残念ながら、時間の関係で、この古城には入らず、ロワール川の対岸から、遠景を眺めただけだったが、十分にその歴史的な趣を感じ取ることができた。

次いで、ロワール川の支流シュール川に浮かぶように立つ白亜の城であるシュノンソー城を訪れ、城の内部の部屋と庭園を鑑賞した。先ず、この城を築くために、トマ・ボイエとその妻カトリーヌ・ブリソネが、マルク家の城塞と水車を壊し、塔の部分のみを残したそうだ。その前庭と塔を眺めつつ、壮大なシュノンソー城の城門を抜けると、城の築城に貢献したトマ・ボイエとその妻カトリーヌ・ブリソネの紋章と「シュノンソー城が完成したならば、私の名は歴史に残る。」という意味の金言の句碑が見られる。並々ならぬ自負であったようだ。次いで、礼拝堂があり、やはり、祭壇の右手の石細工の祭器卓に、ボイエ家の金言が刻まれている。さらに行くと、当時の国王アンリ2世の愛妾であったディアーヌ・ド・ポワティエの部屋と、皇后であり、未亡人となった、カトリーヌ・ド・メディシスが摂政として執務をとったという緑の書斎がある。その他、図書室、ギャラリー、厨房、フランソワ1世およびルイ14世のサロン、五人の王妃の居室などがあって、当時の王、后らの生活ぶりが偲

ばれる。この城は、16世紀から6代にわたって、女性が城主であったらしい。また、この城には、ディアヌ・ド・ポワティエの庭園とカトリーヌ・ド・メディシスの庭園と2つの大きな庭園がある。愛妾の庭園の方が、大きくて立派に見えるのは、考えて見ると、不思議な気がする。ロワールの古城は、数あるけれども、シュノンソー城の内部と庭園を集中的に鑑賞することになった。いずれにせよ、フランス中部のロワール渓谷にある古城は、バロア朝時代の王、妃らが過ごした中世の趣を残す名城が多いようだ。

平成24年6月24日

短歌：ロワールの古城を廻る時ふと思う愛の葛藤人の世の常

令和3年1月25日

俳句：澄んだ水浮き城支える青さかな

科学と芸術

最近、科学と芸術の融合がかなり喧伝されている。もともとは、両者は、別々に発達したものであるが、現代は、その融合の価値が、認められ出したということらしい。想像力と創造力、新しい着想や閃きには、異分野の知識や感受性が、役に立つということであるようである。科学にも、自然科学だけでなく、人文科学や社会科学もある。芸術も、建築などの造形美に関するアポロンの芸術や、音楽などの陶醉美に関するディオニソスの芸術もある。簡単に融合というが、このような、多岐にわたる分野の融合は、果たして可能なのであろうか？だが、20世紀最大の天才科学者と称されるアインシュタイン博士が、バイオリンの演奏の名手だったという。芸術的な感受性は、新しい自然科学的発見につながるということかもしれない。最近、最先端のデジタル技術と、日本の伝統的な保存修復技術による手技や感性の融合により作られた、高精細な再現文化財（クローン文化財）というものがあり、喪失した名彫刻や仏像を復刻させる話もあるようである(宮廻正明「クローン文化財」学士会会報, 928, 2018)。科学技術が、芸術の存続と再生に役立つことの実例であるようだ。

令和3年1月24日

俳句：雪景色夜空に浮かぶ遠い星

短歌：お釈迦様クローンで復活文化財

ドレスデンおよびマイセンタ探訪記

平成11年、大濱先生(当時日本大学工学部建築学科教授)が、議長を務める「高分子材料とコンクリートの接着」に関する第2回 RILEM 国際会議 (ISAP'99) が、ドイツのドレスデンの国際会議場で開催された。福島敏夫は、「高分子材料で表面仕上げをされた中性化したコンクリート中の水と酸素の同時移動による鉄筋腐食進行に関する理論的解析」という内容での発表を行うために、この国際会議に参加した。会議終了後、ドレスデン工科大

学のキャンパスの中庭で、懇親会があり、有名なドイツのザッセ教授も参加されていた。ドレスデンの市内観光を行い、また、村上先生(当時秋田大学土木学科教授)と一緒に、マイセンの町を訪れた。これは、その時の紀行文である。

(1) ドレスデン探訪

ドレスデンの町は、東独の方のザクセン州にあり、ポーランド王を兼ねていたザクセン国王フリードリヒ・アウグスト1世の首都である。エルベ川の谷間に発達し、古い宮殿建築が、立ち並んでいたが、ドレスデン城が有名である(ドレスデン中心地区のエルベ河畔は、その美しい景観が認められて、ドイツの世界自然遺産になっていた。最近、橋が建設され、景観が変わったという理由で、遺産登録を抹消されたようである。景観の維持とインフラストラクチャーの整備とのバランスが必要であるようだ)。城壁に描かれているマイセンの白磁を使った「君主の行進」の陶彩画が有名である。当時、石炭を燃やすために、壁が、やや黒んでいたのが、気になった。また、空襲で崩壊したが、その後再建された「聖母マリア教会」も訪れた。地下2階を含む5階建ての教会建築であり、今は、ドレスデン市のシンボルにもなっているようである。

(2) マイセン探訪

マイセンは、ヨーロッパの白磁器の発祥の地である。日本の白磁に対するあこがれから、ザクセン王が、白磁技術の振興を図ったために、マイセンの白磁開発がなされ、ヨーロッパにおける白磁文化の中心地区となったという。日本の白磁も、もともとは、李氏朝鮮の李参平が、日本に白磁技術をもたらし、日本の白磁技術の源になり、有田焼として開発されたのが始まりである(李参平は、有田焼の陶祖として、今も、大きな影響力がある。昔、2002年北九州市国際会議場で開催された「景観フロンティア国際シンポジウム」の際、この李参平が、旧鍋島藩の要請を受けて、白磁の源になる陶土を探り当て、白磁を開発するまでの過程を、動画で見たことがあった。)。極東の朝鮮、日本およびヨーロッパにおける陶磁器を介した東西文化交流の一つの事例かもしれない。このドレスデンの白磁技術の詳細を展示しているマイセンにあるドレスデン磁器博物館を訪れた。かなり大きな壺に近いものも含めて、大小の白磁の数々あり、圧巻であった。マイセンの町並みは、簡素な白を色調としていた。マイセン聖母教会は、ドイツのプロテスタント教会で、マイセンの旧市街地の中心部であるマルクト広場にある。外観は漆喰の石造りが美しいゴシック様式になっているようだ。その街並みも、昔ながらに残っていた。

令和3年1月24日

俳句：エルベ河夕日に映える建築群

(令和3年1月25日修正版)